

博物館NEWS 博物館ニュース



沖縄県八重山郡竹富島のまちなみ

白い漆喰でかためられた赤瓦、その上にはシーサーという魔よけの獅子がユーモラスな表情でちょこんと乗っかっている。小さく砕けたサンゴでできた道は、夜歩く時、ハブがいてもわかるように白いのだという。そんな家と道の沖縄県竹富島は、沖縄県の原風景が残る島としてよく紹介されます。

しかし、実際には薩摩藩の圧政の元、人頭税で苦しめられた沖縄県の人たちは、瓦を使った家など作る余裕はほとんどなく、このような構造の家が造られはじめたのは昭和初期

とされており、太平洋戦争頃まではほとんどの家がわらぶき屋根であったはずです。

でも、日本での黒潮文化圏の南端ともいえる八重山地方は、その地域独特の生活習慣を残しています。豊作を祈願し、収穫を祝う、その土地のあらゆる事物に感謝の念を忘れない・・・四季折々のいろいろな祭りの中にも、日本本土とは違うきびしい自然の中で生きる人々のやさしさを感じさせてくれます。

(動物担当：大原賢二)

春を知らせる年中行事

— 徳島県の太々神楽 —

磯本 宏紀

野山には草花が咲きほこり、虫たちの息吹を感じるようになる頃、県内各地で春祭りが行われます。人々にも再び活気が戻ってくる季節です。

ところで、この春祭り、実は稲作の1年間のサイクルに大きく関わっているようです。著名な民俗学者柳田國男の著した『日本の祭り』には次のような文章もあります。「人のよく言う春秋の両度の祭、これは農業ことに稲作の初めと終わりとを、表示したことはほぼ確かで、その前と後と定まった日を、山の神が田に下りまた田の神が山に入る日として、祭るといふ風も農村には多い。」という一節です。すなわち、田畑を自然災害から守ってくれると信じられていた田の神を迎え、その年の豊作を祈念する儀礼として認めようとする説もあるようです。そして、この五穀豊穡を祈願する祭りは宮廷行事の祈年祭とも結びつくともいわれますが、その根底に同一のリズムがあるとされるのです。

そんな春祭り、県下では地域によってさまざまな形で行われています。徳島市や鳴門市など県東部では各地の氏神では巫女（舞姫とも呼ばれます）が舞う太々神楽が広く行われますし、県西部の三好郡や美馬郡に場所を移すと百手祭りといって、「鬼」などと書いた的を目標けて弓矢で射通すという的当て行事が氏神の境内で行われています。そのほか、伊勢神楽の系統を引くと言われる湯立て神事を行ったり、あるいは本社から御旅所までの神輿の巡幸を行っている地域もあります。有名なところでは、鳴門の大麻比古神社では4月24日に行われる湯立て神楽があります。そのクライマックスシーンでは、注連縄で囲まれた祭祀空間にいて神事を執り行う巫女が、釜で沸いた湯を大麻を用いて氏子をはじめとする参拝者にはねとばしてかけるのです。この湯がかかると1年中健康でいられるとされるようです。いずれにしても、県下の春祭りは、バリエーションに富んだものだといえるでしょう。

今回、そんな春祭りの一つ、徳島市八万町宮



銅の鳥居

ノ谷にある八幡神社で行われた太々神楽を紹介していきます。この八幡神社は通称「銅の鳥居」さんとして地域の人には親しまれるように、檜の外回りを銅板で巻いた両部鳥居があり、それが通称

にも結びついています。この鳥居付近は地域の結集の場でもあり、幕末には郷土をここに集めて訓練したという伝承も残っています。

この八幡神社では4月15日に春祭りが行われ、このときに太々神楽が奉納されます。春祭り当日、社殿内の中央には高さ2メートル程の榊山が設けられ、神前に向かって右手には氏子各地区の氏子総代23名が座り、左側には参拝者及び巫女が座ります。現在県下では巫女を務めることのできるのが藤川、宮崎両家の女性のみであり、八幡神社でもここから巫女を頼んでいます。現存する太々神楽が徳島、鳴門などを中心にして県東部に分布するのもこの巫女両家との関係からだという説もあるようです。

さて、次に正面に宮司、禰宜、権禰宜が座り、禰宜は巫女の動きにあわせて太鼓を打ちます。中央の榊山とは金、銀の八尺鏡や矛を象った紙飾り、五色の色紙が榊に付けられたもので、この周りを巫女が時計回りに廻りながら、神楽を舞うのです。この榊山には神が宿るものとされ、神楽とは神降ろしの約音とも言われることから、神の霊威を媒介する装置、すなわち依り代といえるでしょう。そのほか、神前には米3俵の新米が氏子中から奉納されるほか、尾頭付きの鯛や酒、塩、鏡餅、菓子類、季節の野菜・果物などが供えられます。



うずめの舞

記紀神話として古代に編まれた『古事記』の「あめ いわや と天の岩屋戸」の段では「あめのうずのみこと天宇受賣命、かくやま天の香山の天の日影をたすき手次を繫けて、まさき天の眞折をかづら鬘として、うけ天の香山のむなち小竹葉を手草に結ひて、うけ天の岩屋戸に槽伏せてもみも ほと踏み轟こし、むなち神懸かりして、胸乳をかき出でもみも ほと裳緒を陰に押し垂れき。」と記されています。天宇受賣命があまてらすのおおかみ天照大御神の再現を望んで、たすき髪飾りをし、たすき禰を掛けてあまてらすのおおかみ桶をうつぶせにして踏みならし、神懸かりの状態となって踊ったという場面が描かれているのです。徳島県で行われている太々神楽はこのような場面をモチーフにしたものとされ、太陽の再現、生命の再生、そして春の訪れを祝いまた祈念したものととも解釈できるわけです。



面をつけて舞う巫女

では、ここで太々神楽の一連の流れを見ていきましょう。八幡神社では、まず禰宜が氏子総代一同、次いで参拝者を祓い清めた後、巫女が扇を左手に、鈴を右手に持ってあまてらすのおおかみ榊山の周りを巡る、うずめの舞が始まります。禰宜の叩く太鼓の重壮な音にあわせて巫女は榊山の周りを静かに舞います。右手の鈴をゆっくりと振り鳴らし、左手の扇を静かに揺り動かします。うずめの舞は榊山を3周すると終わり、再び宮司によってのりと祝詞が奉納されます。その後、つるぎ剣の舞が奉納されます。剣の舞の時、巫



榊山

女は面をつけ、剣をもって榊山の周りを1周しながら舞います。次いで、剣を置き、今度は右手に鈴、左手にはおおぬさ大麻をもって軽やかに舞います。足はすばやく、しかし確実に地べたを

踏み鎮めるように動かし、悪魔祓いをします。榊山を2周するとこの剣の舞は終わりになります。次に、宮司と氏子代表が神前でたまぐし玉串の奉納を行い、春祭りが終わります。

八幡神社の宮司さんによると、こうした一連の所作によって祭りの場には神威がもたらされ、その年の豊作をも約束されるというのです。そして最後に一同は競うようにして榊山から八尺鏡や矛の飾りのついた榊の枝を1本ずつをとり、これを各家に持ち帰り神棚へとお供えします。この神威が降ろされた榊を持ち帰ることによって、その年1年間の豊作と家内安全がもたらされると解釈されています。そのためか、この榊は不思議なことに水につけておかなくとも神が宿っているがゆえに枯れることはないと言われるのです。また、春祭りの際にお参りし、榊を持ち帰ったところ、たてつづけに幸運が訪れ、人生の大きな転機になったという人さえいたそうです。

かつて春祭りは稲作のはじまりにあたっての豊作祈願であり、安全祈願でありました。もちろん現在でもその意味を失ってはいませんが、現代社会を生きる我々にとっても恵みをもたらしてくれる神との出会いの場であり、日常生活に潤いを与えてくれる地域結集の一場面ともいえます。

この春祭りが終わる頃、県内は活気に満ちた新緑の季節を迎えるのです。

なお、今回は春祭り調査にあたって八幡神社の宮司さんはじめ皆さんにお世話になりました。末筆ながら御礼申し上げます。 (民俗担当)

新旧館長あいさつ

天羽前館長が平成14年3月31日をもって定年退職され、4月から両角新館長が就任しました。
おふたりにそれぞれ思い出、抱負を語ってもらいました。

人・モノとの出会いの34年 天羽利夫



1968年4月、旧館の徳島県博物館に学芸員として勤務して以来、県文化の森建設事務局や県教委文化財課勤務の6年間を除いて、本年3月末に定年退職するまで徳島県立博物館でお世

話になりました。私のこれまでの人生は、「博物館」の3文字が一時たりとも頭から離れることはありませんでした。退職して数ヶ月が経ちましたが、まだ博物館に勤務しているような錯覚に陥ることがあります。

今、博物館での生活を振り返ってみますと、「楽しい日々」の一語につきます。私が博物館に勤務するようになった頃は、まだ全国的に学芸員の職についている人は数少ない状態でした。学芸員と書いた名刺を手渡すと、学芸員というのは何をする仕事ですかと聞かれることもしばしばでした。その学芸員という職を私はこれまで堪能させてもらいました。

学芸員という職の魅力は、私の経験から「人とモノとの出会い」であると思います。日常的にさまざまなモノに出会い、それを手にとって触れることができ、そのモノの秘める謎にあれやこれやと語り合うことができました。また、博物館活動を通じて多くの人に出会うこともできました。旧館時代の30年前のことになりますが、私が担当した「親と子の遺跡巡り」の行事に参加した小学生が、考古学の虜になり、大学で考古学を専攻した後郷里に帰ってきて、現在ある市教委で発掘の仕事をしています。その人とは今も考古学仲間としてお付き合いをしています。

「人とモノとの出会い」の魅力は博物館を利用する側からも同じことが言えると思います。博物館の展示室で出会う一つのモノ、博物館で出会う人びと、ここに博物館の大きな魅力があるのではないのでしょうか。一人でも多くの方が博物館を訪れ、この魅力を味わってほしいと願っています。

館長就任にあたって

両角芳郎



私は1986年に、文化の森及び県立博物館の建設、開館後の博物館運営の一端を担うため、大阪市立自然史博物館を退職して徳島県へ移籍して参りました。それ以来はや15年が過ぎま

した。この間、皆様方のご支援を受け、博物館が開館して博物館活動も一応の軌道に乗り、徳島県の中核博物館として、あるいは研究を大切にする博物館として一定の実績を積み重ねてきました。しかし、開館10周年が過ぎ、博物館の更なる発展へ向けて脱皮しなければならない時期にさしかかっているように思われます。当初、10周年での実現を目標に掲げていた常設展のリニューアルも、まだ実現の目途がたっていません。職員の世代交代も大きな課題です。このような時期に果たしてリーダー役が務まるかどうか不安になるとともに、責任の重大さを感じます。

この数年の全国の博物館をめぐる状況は、来館者の減少や運営予算の減少にみられるようにきびしさを増しています。その反面、教育改革が進む学校教育への支援、環境保全や文化財の保存に対する博物館の立場からの提言、様々な情報の提供などの多くの面で、博物館への期待が高まっているのも事実です。博物館活動の基本である調査研究と資料収集を着実に進めることは当然のこととして、その基礎の上に立って更に何ができるかを職員とともに考えながら、気軽に訪ねて利用しやすい、利用して役に立つ「親しまれる博物館」づくりを推進し、県民の期待に応える努力を続けていきたいと思ひます。

皆様方のご指導ご鞭撻をお願い申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



日本の代表的な民俗学者の柳田國男は“稲”と“子安貝”の伝播と分布から、日本文化の淵源を探求し、日本民族文化の源流を南方に求め、その流れを「海上の道」と呼びました。

黒潮が、生物の移動だけでなく人やそれに伴う文化の移動に重要な貢献をしてきたことは間違いないと思われ、徳島の生物や民俗文化の成立基盤の一端を探るために、黒潮の洗う地域の民俗文化や生物相と比較してみることは大切なことです。

本企画展では、フィリピンや沖縄から南九州へと渡ったと思われる丸ノミ型石器や磨製石斧、貝類の加工品等の資料を中心に、人々が黒潮に乗って北上した時代を紹介します。また、逆に南へと向かう時代の資料もあわせて紹介して、黒潮が海洋民族の移動に影響したことを示します。

同時に、南西諸島から四国南部、紀伊半島などに黒潮の影響を受けた分布をしていると考えられる植物や動物なども紹介します。また、南西諸島の島々や南九州の自然、人々のくらしをとりあげ、その生物、民俗文化および徳島にも関わると考えられる資料なども紹介します。

展示内容

海上の道はあったのか	黒潮反流
イネの来た道	まれびとの系譜
黒潮のはこんだもの	琉球弧

開催期間

2002年 7月20日(土)~9月1日(日)
月曜休館(ただし8月12日は臨時開館します)

開館時間

午前 9 時30分 ~ 午後 5 時

観覧料

一般 200円(160円)

大学生 100円(80円)

小・中・高校生は無料

()は20名以上の団体料金

学芸員による黒潮トークと展示解説

7月28日(日) 隆起を続けるサンゴ礁の島―喜界島―
中尾賢一

8月 4日(日) 植物の目から見た黒潮の道：小川 誠

8月11日(日) コメの渡来ルート：茨木 靖

8月18日(日) イモの祭り

―根栽農耕文化と黒潮の道―：庄武憲子

8月24日(土) 本土と南西諸島のヤスデ、貝、かに
田辺 力

8月25日(日) 南島の熊野信仰：長谷川 賢二

9月 1日(日) 昆虫と黒潮の道：大原賢二



特別陳列

人権教育のための国連10年協賛

「丹波マンガン鉱山の記録 - 在日コリアンの労働史 - 」

丹波地方には、多数のマンガン鉱山があり、1896年頃から1983年頃まで採掘が行われました。これらの鉱山で働いていた人々の多くは、朝鮮半島からやって来た人たちでした。

この特別陳列では、在日コリアンの元鉱山労働者が独力で設立した人権博物館である、丹波マンガン記念館(京都府京北町)の収蔵資料をもとに、鉱山に生きた人々のおかれた状況や、日本の歴史のなかに刻まれた人権侵害の実態を示していきます。差別と人権について考える機会となれば幸いです。



主催 徳島県立博物館、徳島県博物館協議会
後援 人権資料・展示全国ネットワーク
会期 6月25日(火)~7月7日(日)(月曜休館)
会場 企画展示室
観覧料 無料

展示解説

日時 7月6日(土) 午後1時30分 ~ 3時

会場 企画展示室

講師 李龍植氏(丹波マンガン記念館長)

鶏蒔絵印籠

狩野典信下絵 飯塚桃葉蒔絵

にわとり まき え いんろう
 鶏の絵を蒔絵であらわした印籠です。底面に「栄川院」と「観松斎」の銘があり、前者が下絵の作者名、後者が蒔絵の作者名と解されます。

栄川院とは、幕府奥絵師である木挽町狩野家の当主、狩野典信（1730-90）です。白玉斎とも号し、画家として最高位の法印にまで昇りました。

観松斎とは、蒔絵師の飯塚桃葉（?-1790）です。明和元年（1764）に阿波徳島の藩主蜂須賀重喜に召し出され、江戸で仕事をしました。代表作に、宇治川 蛸蒔絵料紙箱・硯箱（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）があり、印籠の作者としても有名です。

この印籠については、近世の蒔絵師を研究されている高尾曜氏が、以下のように指摘されています。

昭和8年の『蜂須賀家売立目録』に、「観松斎蒔絵印籠 十二個」と題して、印籠3個の写りが載っています。ただし3個とも、鶏蒔絵印籠とは違います。つぎに、昭和13年の『松宝山荘売立目録』（東京美術倶楽部刊）に、「栄川院下絵 観松斎 / 東方齋作十二ヶ月印籠」と題して、先ほどの3個をふくむ印籠12個の写りが載っており、鶏蒔絵印籠とおなじ図柄も見られます。すなわち、『蜂須賀家売立目録』に載る観松斎蒔絵印籠とは、栄川院下絵の十二ヶ月印籠のことで、この鶏蒔絵印籠はその中の1点である、という趣旨です。

鶏の図がなぜ12ヶ月の1つなのか、今のところ説明できません。しかしご指摘は、大筋で正しいと思います。

鶏蒔絵印籠は、全体を金地とし、鶏を高蒔絵によって立体的にあらわします。鶏冠には朱粉を蒔きますが、表面に細かい凹凸がついています。眼には水晶をはめ、首まわりの羽毛には朱金という技法をつかい、胴体には赤金と青金を蒔き分けます。毛筋の細かい線は付描きでひきます。尾羽などは、銀粉を蒔くところと、透明な漆の面に金粉を蒔きばかすところがあり、貝や金の小片を置きならべて、毛筋の線をあらわします。

真横を向いている、一羽の雄鶏に注目してみましょう。羽毛でおおわれた体が、柔らかく肉取りされています。片方で立つ脚にも、鳥の脚らしい弾力感がこもります。尾羽は、透明感のある塗りに、貝片が青く輝いて微妙な効果を出しています。

宇治川蛸蒔絵料紙箱・硯箱や、そうきゅうこう 浄九江の瀟湘八景図（博物館ニュース41号参照）など、桃葉の手がけた蒔絵には緊張感がみなぎりません。それらに比べると、鶏蒔絵印籠は楽な気持ちで作られたようです。しかし、なかなか出会えない秀作です。

（美術工芸担当：大橋俊雄）



図1 鶏蒔絵印籠



図2 同



図3 銘

園瀬川探検

博物館には、博物館の活動を通じて広く自然や文化に親しむことを目的とした、友の会があります。友の会は会員制で、博物館の通常の行事とは別に、様々な活動を行っています。今回は、その中の一つをご紹介します。

博物館のある文化の森総合公園のすぐ前を園瀬川という川が流れています。この川は、佐那河内村の大川原高原の近くに源を発し、徳島市街の新町川に合流する、全長25.5 kmの小さな川です。この川の河口から源流まで、会員の皆さんと学芸員と一緒に、流域の歴史や文化、自然に係わりのある、いろんなものを観察しながら、歩き通そうという試みを行っています。2000年度から始めて、現在まで6回の探検を行いました。

通常の博物館の行事ですと、博物館側が入念な下調べのもと、メニューをお膳立てするのですが、園瀬川探検では、そのようなことは行いません。

地図上で大まかなコースを決めたり、文献資料を調べておく程度のことにはしますが、原則として行き当たりばったりでやっています。それだけに何に出くわすかわからない楽しみがあります。講師も学芸員ではなく、参加した皆さん一人一人であったり、現地で出会った地元の人々であったりします。

園瀬川流域には、とくに有名な名所・旧跡などがあるわけではありませんが、実際歩いてみると、実にたくさんのお見どころがあることがわかりました。当初は2年もあれば源流までたどり着くだろうくらいに思っていたのですが、あちこちで小さな発見があって、なかなか進まず、やっと佐那河内村の中心部にたどり着いたところです。

皆さんも、友の会に入会して、園瀬川探検に参加しませんか！

(動物担当：佐藤陽一)



支流の冷田川で地神を調べる(徳島市八万町夷山)



森の中で出会ったアカテガニ(徳島市八万町向寺山)



樋口古墳の石室(徳島市上八万町樋口)



田んぼの畔で植物観察(佐那河内村東地)



切り通しの魔除け札(徳島市上八万町花房)

7月から9月までの博物館普及行事

あなたも参加して見ませんか？

シリーズ	行事名	実施日	実施時間	対象(人数)
野外自然かんさつ	川魚かんさつ	7月28日(日)	9:30~12:00	小学生から一般(40名) 2
	水生昆虫のかんさつ	8月3日(土)	10:00~12:00	小学生から一般(50名) 2
	漂着物探し	8月4日(日)	9:00~17:00	小学生から一般(35名) 2
	鳴く虫のかんさつ	9月14日(土)	19:00~21:00	小学生から一般(30名) 2
	河口のいきもの	9月22日(日)	11:00~13:00	小学生から一般(70名) 2
ミュージアムトーク	関ヶ原合戦と蜂須賀家	7月13日(土)	13:30~15:00	小学生から一般(50名) 1
	古代のわざ	9月14日(土)	13:30~15:00	小学生から一般(50名) 1
歴史体験	火おこし	7月21日(日)	10:00~12:00	小学生から一般(30名) 2
	火おこし	8月24日(土)	10:00~12:00	小学生から一般(30名) 2
	土器づくり	9月28日(土)	13:30~16:00	小学生から一般(40名) 2
歴史散歩	脇町を歩こう	9月8日(日)	13:30~15:00	小学生から一般(30名) 2
室内実習	こどもレブリカ教室	8月3日(土)	13:30~15:30	小学生から一般(30名) 2
	植物標本の作り方・名前の調べ方	8月10日(土)	10:00~15:00	小学生から一般(30名) 2
	かんたんな貝の標本の作り方	8月18日(日)	13:30~15:30	小学生から一般(40名) 2
	標本の名前を調べる会	8月23日(金)	9:30~16:00	小学生から一般 1
みどりの探検隊	夏的那賀川に咲く植物を探そう	8月17日(土)	10:00~15:00	小学生から一般(15名) 2
	秋的那賀川に咲く植物を探そう	9月29日(日)	10:00~15:00	小学生から一般(15名) 2
みどりの工作隊	葉脈標本できれいなしおりを作ろう	8月25日(日)	10:00~13:00	小学生から一般(40名) 2
特別陳列関連行事	展示解説	7月6日(土)	13:30~15:00	「丹波マンガ山脈の記録」 小学生から一般(50名) 1
企画展 「海道をゆく」 関連行事 黒潮トーク	隆起を続けるサンゴ礁の島 - 喜界島	7月28日(日)	13:30~14:30	小学生から一般(50名) 1
	植物の目から見た黒潮の道	8月4日(日)	13:30~14:30	小学生から一般(50名) 1
	コメの渡来ルート	8月11日(日)	13:30~14:30	小学生から一般(50名) 1
	イモの祭り(根菜農耕文化と黒潮の道)	8月18日(日)	13:30~14:30	小学生から一般(50名) 1
	本土と南西諸島のヤスデ・貝・カニ	8月24日(土)	13:30~14:30	小学生から一般(50名) 1
	南島の熊野信仰	8月25日(日)	13:30~14:30	小学生から一般(50名) 1
	昆虫と黒潮の道	9月1日(日)	13:30~14:30	小学生から一般(50名) 1

1は、申し込み不要です。他は、往復はがきでお申し込みください(各行事の1カ月前から10日前までに届くように)。

2、は小学生の場合保護者同伴。

詳しいことは、博物館にお問い合わせください。

Wanted!

ヒラズゲンセイをさがしています

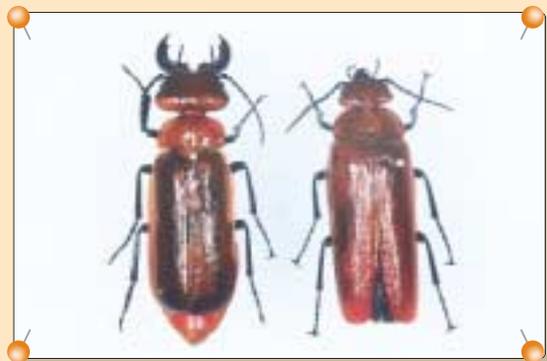
博物館ではこの虫が、徳島県内でどのような分布をしているのか、調べています。もしこの虫を見かけたら、ビニール袋などに入れておいていただき、昆虫担当の大原賢二までご連絡下さいますようお願いいたします。

ヒラズゲンセイは体が真っ赤でよく目立ちます。さらに、キバと触角、すべての脚が黒色で、頭が大きいことで、簡単に区別できます。

徳島では、普通は6月初めから成虫が出始め、一番多いのは6月中旬頃です。7月いっぱいまで成虫が見つかっています。

なお、この虫を長く手でつかんでいると、

かぶれることがあります。あまり長く手に持たないようにして、すぐに袋などに入れるようにしてください。



博物館ニュース No. 47

発行年月日 2002年 6月15日
編集・発行 徳島県立博物館 〒770-8070 徳島市八万町向寺山
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197
http://www.museum.comet.go.jp